

一之卷

泉鏡花

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

目次

墓參

彫刻師

紅白

學校

秀

花將棊

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

十一の時母みまかり給ひつ。年紀十四の春のはじめ、其の命日に當りし日なりき。活計の忙しきに、たゞ懐しく思ふのみ、御身代りてものせよといふ、父の言葉身に染みつゝも、予は墓参にとて立出でぬ。

蒼空には風の聲、野面に蝶の飛交ふにて、纔に風もありと見ゆ。春興轉た酣なれば、人さまノ、に浮かれいで、市をなれ、坂を攀ぢ、日暮の丘の展望あたり、扇が原、題目堂、鶯が峰の此處彼處、一群々々落合ひて、筵を擴げ、氈を敷き、割籠を開き、吸筒を傾けなどして、老若男女の集へる上に、鶯は颯と翼をのして、靜に打舞ふ輪の中に、湖も見え、川も見え、橋見え、里見え、城見えて、市街も眼下に見え渡る、其麗さに引替へて、ひとむら樹立松杉の鬱蒼として生茂れる、あゝ、墓原の春寒さよ。

唯見れば母の墳墓の、誰れ惡戯にや傍なる松の根に倒されて、臺石ばかり残りたり。

こは其時に限りしならず。舊此處に何とかいひし臨濟宗の巨刹ありしが、何時の頃か亡び果て、今は唯そのなごりの鐘撞堂に、一杵の撞木懸れるのみ。寺領なりける墓地を開きて、染井或は谷中の如く、土地の埋葬地としたりしなるが、固より墓守る僧もなく、春の山、秋の山、をりノ、茶屋を營むばかり、一軒家もあらざるに、町人が遊山の場とは、別に隔ての垣もなく、松杉の其の樹立にて、塚をなせるに過ぎざれば、わるあがきする里の兒、醉漢などの侵し入りて、墓石をおしこかし、印の小松の枝をなぎ、卒塔婆を抜き棄てなどするが、墓あらしとて數々あり。

然らぬだに、手向の水も涸れがちや、去にし月捧げたる、花の枯れしも果敢なきに、恚う荒れ果てし草葉の蔭の、母の亡骸も年経れば、あとも留めずならむかと、はやくも涙さしくみぬ。

庭の隅なる茶の木の蔭に、蛙の墓を築きし手に、其の墓石を搔抱き、舊の處に直し据ゑむと、幼心に力も料らず、押せばとて、曳けばとて、如何にして動くべき。

むねのせまりて切なきに、といきして打仰ぐ、樹間の天は藍の如く、ひらり／＼と凧の影、日脚傾く塔婆にうつりて、哄とさゞめく笑聲、遠近に聞ゆるにぞ、心なき人たちよ、と覺えず眉の動きしが、詮術もなく首垂れつゝ、然るにても、打棄て去なむが口惜く、效あらずと知りながら、再び犇と取継り、傍目も觸らで力を籠めたる、肩に手を置き背後より、

「あなた、お待ち遊ばせ。あの

と聲優しく、ふと呼びかくる者あるにぞ、振仰ぎ、見返れば、襲着したる妙なる姿、すらりとしたるが立ちたりき。其美しさ氣高さに、まおもてより見るを得ず、唯眞白なる耳朶より、襟脚にかけ、頬にかけ、二筋、三筋、はら／＼と、後毛の亂れかゝりたる横顔を、密と見たるのみはなじろみぬ。

渠は片頬に微笑みながら、

「今ね、誰かに然ういつて、お墓を直さしてあげますからね、

お可哀相に、」

といひかけつゝ、其瞬間一點の、一事の胸にあることなく、無心なりし予が面を、ちつと視めて、面を背向け、
「それではね、待つておいでなさいませよ。」と行きかけて、また見返りぬ。

貧しきを心に留めず、氣まゝに註文を打棄て置くを、名人上手と謂ふべくば、彫刻師なりし予が父も、名工の一として世に數へられ給ひなむ。

「長常さんはこちらですか。」と細工場の格子に訪なふ人あり。跪きて迎ふるとて、予は其顔を見て驚きぬ。來客は調子高に、

「おや此家のか。」
とまづいへり。

をさなきわれは、ものをもいはず、慌しく引返し、細工盤に打向へる、父の許に駈け行きて、

「父上、あの、過日來話した、あの、母上の。あの、あの、」
と口早に急込むにぞ、父は皺みたる額をあげ、

「あの、何だ。」

「えゝ、母上のお墓を直して、あの、直してくれましたね、其人が來ましたよ。」

父は聞くより色動けり。

「や、何、それはノ。早く、これ、何だな。汝、早く此方へといはんかい。」

奥深からぬ住居なれば、早くも彼方にて、聞着けゝむ。

「御免なさいよ。」

と打笑みながら、客は此方に入來れり。無愛想なる父の珍しくも歡び迎へて、

「これは、これは。」

「はい、はじめまして。」

「いや、よくおいでなさいました。えゝ、何かはや倅がそゝつかしうございますので、まことに失禮。先達ては、また何

うも難有いお志で、佛も嘸喜びましたことであらうと、
はい。何が貴方、左様なお情を蒙りながら、何故お姓名
を承はらないと、散々叱言をいひました。根つから世間知らずで、とつともう役たゝず、まことに不念な、行届きませぬ、
お住所も分りませねば、御禮にも出られませず、残念に存じましたに、まあ、よくおいで下されました。悴や、おわびを申
さぬか。」

と懇に謝したるを、迷惑げに打消したり。

「然う御丁寧では痛み入ります。別に私が心あつていたしたといふでもなし、家のお嬢様が何です、あたりが酷く亂暴だ
つたので、何處かあの墓原の方へ一人で氣を抜きに去らつしやつたんださうです。すると御子様ですか。お墓につかまつて、
泣きさうにしておいでなすつたのを見て、お可哀相でならないから、汝行つて直して上げて、とおつしやるので。え、友的
てえ男と私と二人でね、昇いでのせましたばかりなんで、深切な御當人はお嬢さまなんです。何ね、飛んだ其氣の優しいお
嬢だもんですから、歸つてからも何うも母上様がおありでないやうだ、そりやもうお召物のやうすでも能く知れる、お可哀
相に何處の方だらうつて噂をして居りました。何ですか、矢張そのおつかさんがおいでなさいませぬのですかね。」

父はもろくも打濕りぬ。

「はい、これが十一になります時、二十九で亡くなりました。誠にはや、不心得な奴でな、はゝはゝ、腹が立つてなりま
せん。お嬢様とおつしやれば、お若からうに、御奇特な。何とも、お禮の申しやうもございません。」

と再び頭を下げたるに、壮俊は手をあげて、
「それでは、私が御挨拶をうけるやうで、却つて何です、もうこれだけにいたしませう。時に今日あがりましたのは、實
は其お嬢様の御使なんですが、何うも、恚うなつて見ると、恩に被せますやうで、些と申しにくゝなつたやうですが、何で
すか、先々月からお頼み申して置きました、あの指輪とやらですが、まだお出来にはなりませんまいかね。時計屋の深水で
す。」

父は驚き、

「え、それぢや貴方は。」
「はい、店のものです。何時も小僧を超越しますが、今日は一寸次手がございまして、私に参つて、よくお願い申してくれ
と、こんなことで。え、決して御催促はいたしません、お間にはどうぞお心がけなすつて下さい。はい、不思議な御縁
です決して恩にや被せませんが、何ですな、一番恩に被て、はやく拵へて下さると、なほ結構ですな、は、は、は。」
と笑うて歸りける。

指環は日を経て出来あがりぬ。父は傍にわれを招きて、

「新次、お待兼の指環が出来たぜ。お前を可哀さうだといつてくれる、深水の娘の註文だ。念入りでやらかしたが。」
と打傾きノ、細工ぶりを、とみかうみて、

「うまいな、こりや、近來の大出来。我ながらよくしたものだ。新次、お前なんざ、其年紀で、其明い目を持つて居ても、こりやとても見えめえな。手放して人に與るなあ、何だか惜しくつてならないが、あつらへものだ、持つて行け。そしてな、長常銘を鑿りました、と大威張で渡して来い。」

予はいそ／＼して出で行きぬ。

學校より一ツ此方なる辻の角に、唐物店とむかひあひて、間口こそは劣りたれ、奥行深き、時計屋の、行歸に見る店ながら、取分け其日はもの珍しく、また懐しく、たふとく覺えて、直ぐには店に入りかねたり。

小路へそれて電信の柱に凭りて、硝子越に、其方を透してためらひしが、折よく前の日の使の人、奥の方より出で來しにぞ、衝と進み近づきて、

「お誂への指環が。あの

「あゝ然うですか、」

と軽く受けて、土間なる椅子を指さしつゝ、

「おかけなさい。一寸、これ何や、奥へ行つて、金や、お嬢様に申して來な。」

小僧は良ありて引返し、

「ぢや、直ぐこつちからお廻りなすつて、ずつとお通りなさいまし。」

と中戸をあけて導きぬ。通庭の突當に、二戸前の藏ならびたり。壁暗く、柱明るく、高き破風口より日影さして、譬へむ方なき奥床しさ。

勝手を働く一人の下婢の珍しげに瞻るに、顔見らるゝ心地して、予は足早にぞ通り過ぎたる。一室なる火鉢の傍に、其人ぞ居たりける。煩ひやしたまひし、着瘦の肩薄寒げに、襟懸けたる半纏着て、今日は後毛のうるさきまで、咽喉を掠めてこぼれかゝり、重き頭を結へたる、鬚卷の切眞蒼なれば、顔少しく蒼みて見えぬ。

座蒲團を此方に進むるさへ、たゆげに手首の細りたるが、笑顔を向けてものやさしく、

「お使柄恐れ入りますこと。」

「あの、大變おそくなつて、と然う申しました。」

「いえ、ついねえ、待遠いので、おせかし申して、お忙しうござんせうのに。」

いひつゝ渠は掌に、吉野紙の包をひらきて、黄金の無垢の指環を据ゑ、そと打返して視めしが、

「綺麗だこと。まあ勿體ないやうですねえ。母様、」

「どれ。」

と人柄のよき母様も、火鉢ごしに瞳を寄せ、

「何うもねえ。これぢやなるほど一寸やそつとぢや出来ない道理だよ。そして何かい、此お兒かい。」

女は黙して頷きぬ。

「學校へおいでと見えます。まあ、折角御勉強なさいませよ。ちつと遊びにおいでだといゝね。おあひては無いけれど、庭も廣しき、花がるたでもしませう。母様がおいでなさらなくつて、まあ何んなにお寂しからう。」

と溢るゝばかりの情の言葉、胸せまるほど嬉しくて、はき／＼ものも得いはざりき。やがて歸らむとしたりし時、白と紅と牡丹の形の打物を、清らかなる紙に捻りて、予がふところに押し入れながら、

「父上によくお禮をおつしやつて下さいませよ。まことに結構に出来ました。そしてね、あなた。」

と背後より裳を軽く捌きつゝ、する／＼と送り出でしが、（宜しく）とばかりいひすてゝ、彼方向きたまひし後姿、丈は

予^よよりも高^{たか}かりき。

學^{がく}
校^{から}

學校なる會話の時間は、ミリヤアド受持てり。ミリヤアドは、年紀少き米國の美人なりし。ものいひ活々と、風采雄しく、然も心の優しきが、四五年我國に住み馴れたれば、（お早う）（左様なら）などの、差支へず云ひならへり。二三外國の宣教師と、郷里の有志者と相料りて、布教の一種の手段として、英文と漢文を兼ね教ふる、英和學校といふを私立したるに、日々渠は出で來るなり。

學生はわがクラスにては、十名に過ぎざりき。全校を算ふるとも、百よりは多からざるべし。然は今こそあれ、其頃は外國人を見れば直ちにこれを異人と稱へつゝ、人か、あらぬかの如く、忌み、且つ卑みたる折なるに、殊に地方のことなれば、多少其道に心懸あるものも、憚りて、校に登るもの少なりしを、予は予が父を信任したる、なにがしの勧誘に因りて、去年より教場に列りたるなり。

學生の中に年紀の長けたるは、三十四五なるも少ならず、最も少きも十八九、ふ二十を越さぬが稀なれば、予のをさなきが珍しとか。

ミリヤアドは愛で親み、時としては予を偶するに、殆ど幼稚園の生徒をもてすることありき。

課業果てゝ後、リヤアドは、白墨持ちし手の指を、手巾もて拭ひつゝ、衝と予が卓子のうしろに來ぬ。友はみなどや／＼と控所に立去りて、居残りたるは、予と、いま一人、富の市といふ盲目なり。

渠は唯會話の時間のみ列るなり。固より眼の盲ひたるものゝ、書を以て學ぶこと能はざれども、會話は其記憶によりて、多少得ることのあるべければ、いかなる目的のありてにや、切に入校を望みしを、校長には異議のありたれど、宣教師等はもと布教のために設けたる學校なればとて、遂に渠を許せしよし。雨の日も、風の日も、渠は缺席したりしことなく、目の見えぬに心他に觸れざれば、會話は組に伍して人に劣らず、予と成績を争ひ居るなり。

渠は年紀のころ二十八九、身の丈小さく肩瘦せたり。額少しく生えあがりて、五分刈の頭髮柔かに、眉薄く鼻高く、膚白く、頤こけて、細長き顔の身體とはふさはしからず大なるに、白痘痕みち／＼たり。

親しく語りたることもあらねど、予は、じめより渠に對して、嫌惡の念を抱くことを、いかんともすること能はず。いはゆる蟲のすかぬにや、顔を見るだに疎ましかりき。

二人のみ残れるにミリヤアドは靴の音、裳の音軽く背後に來つ。恰も其前の一時間は、漢籍の講讀にて、文章軌範卷之五の、送王秀才序 韓文公とある處、開きたるまゝにして、テーパーの上のありたるを、予が肩越に瞻りけるが、ふと私怪隱居者、とある、私の字をば、美しく白き人指もて指さしつゝ、

「上杉様、私？」

予は微笑みて頷きたり。ミリヤアドはまた、乃知の處をさして、

「これ、乃の字 せう。」

予はまた頷きぬ。ミリヤアドは得意になりて、建中初、天子といふをば、

「それから天、子、旨いでせう。クラスの方、みんな覚えがわるい。私、じゃうずに覚えました。」

と渠は嬉しげに微笑みたり。予は其得意を殺ぎやらむと、頭を掉りて、

「いけません。」

「まあ、いけません？」

と打鬢みぬ。

富とみの市いちは盲しひたる目めに此こ方なたを見向みむきて、たゞにや／＼と笑わらひ居をれり。

「天あ、子ね、と讀よんぢやいけません。天てん子し、天てん子し様さま。」

ミリヤアドは打傾うちかたむき、

「天てん子し様さま、あゝ、みかどのこと？」

「然さうですとも。だから、天てん子ねでツちや違ちがひます。」

「はい、はい、お師匠ししやうさま様、何卒どうぞ叱しからないで教をへて下くださいまし。」

と手の甲かぶも以なて涙なみだを擦こする眞似まねをしながら、ミリヤアドの醉興すいきやうさよ。予よが坐すわりたる同おなじ椅い子すに、窮屈きうくつらしく腰掛こしがくる。袴はかのひ

ださら／＼と、右みぎの袂たもとに觸ふるゝ時とき、妙たへなる薰かをりはと散ちりたり。

近々ちか／＼と予よが面かほをのぞくやうに瞻みまもりながら、

「お師匠ししやうさま様。」

また呼よびかけて、傍かたへにありたるノートの表紙へうしに、其手そのてにしたる鉛筆えんぴつもて、何なにか落書らくがきをはじむるにぞ、睨にらむまねして、

「いけませんてば。」

「あら、叱しからないで下くださいまし。恐こはいお師匠ししやうさま様ねえ。」

「お師匠ししやうさま様もないもんです。」

「いゝえ、お師匠ししやうさま様、お師匠ししやうさま様、可愛かほいらしいお師匠ししやうさま様、これは（力か）の字じ？」

と鉛筆えんぴつもて遂つひに（？）の字じを書かきつけぬ。

「違ちがひます。こゝは、力ちから、と讀よむの。」

「あゝ、ちから、力ちから——神様かみさまの——」

「あゝ、ちから、力ちから——神様かみさまの——」

頷くを見また頷ける、ミリヤアドなほ飽かたで、あちこち漢字をあさりつゝ、王秀才の秀といふ字を、とかくしてさがしてたり。

「この字？」

「秀。」

「秀？」

「秀るとも讀むんです。」

「ひいづる？」

「まさること、勝つこと。」

「人に？」

「然うです。」

と答ふる顔を、屹と見たる、ミリヤアドは衝と立ちあがり、聲の調子も凜として、

「あなた、何故それを忘れました。わるい人、此頃は下稽古をして來ません。あなた一番年紀が若い、そして一番よく出來ます。けれども、いまに負けてしまひませう、人にまけてはなりません。秀、秀。」

と肅として、師の威のそなはる立姿、思はず頭を垂るゝ時、ミリヤアドは足早に外の方にこそ出きたれ。

戒ひしと胸に中りて、さは人目にも見ゆるや。此頃はさてわれながら、いかで慙くまでも思ふ。

指環をとゞけに行きしより、十日あまり早や過ぎぬ。其時渠にあひながら、胸に餘れる感謝の情の、よしいひつくすべくはあらずとも、一言の挨拶は言はでかなはぬ儀なりしを、怪しきまで口漉りて、彼方よりものを言はるゝにさへ、挨拶しくは答もせざりし。さげしまれずや、卑まれずや、と益もなきことをのみ、思ひ續けて、寝つ、覺めつ。

堪へ難きまで懐しく、見たく、遊びに行きたきを、いはれしことの誠ならば、機よし遊びに來れよと、など使して給はざる。要もなき身を何託つけに推して此方より行かすべき。忘れられしか、棄てられしかと、終夜終日なやめばぞ。

悄然として掌に面を蔽ひて俯向きたる、耳許に口を寄せて、

「君、やられたね。」

と冷かに笑ふが如きは盲人なりき。

打僵したくも思ひしが、さする元氣もおとろへき。ものをもいはで歸途に就き、學校の門を出でむとする時、外に彳みたる婦人あり。數多き生徒の中に、人をもとむる状なりしが、予が姿を一目見るより、つか／＼と近づきて、

「貴下だ、貴下だ。もし、あのお秀様がおつしやいました、花を折つてあげますから、すぐお歸途に入らつしやいッて。」

こは嘗て見しことある、深水の家の下婢なりき。

去にし年、母上病あらたまりて、ものを見ることをも得したまはざりしほどのことなりき。

寒さ烈しき頃なりしかば、奥の間なる三疊に、南枕に臥し給ひ、祖母あり、父あり、醫師あり、予といとけなき弟と、居坐ひ正しくかしまりて、互に面を見つるほど、寂として身動もしたまはざりし母上の、靜に雙の目を眠りしまゝ、兩手を空にさしのべつ。また枕頭なる疊の上を、ものを取るさまをして、搔さすり搔さすりしたまひしを、父の見て差寄りて、いかにせし、欲し求むるものありやと、耳近ういはれしに、空にも、地にも美しく妙なる花の香はしき、紅なるが、紫なるが、白きがいるノ、咲満ちたり、二人の兒等に手折りて取らせむ。見たまへ此處にも、あれ、かしこにも、と紅梅の荅綻ぶ状に、結ぼりたる屑とけて、うつとりと、かすかに微笑みたまひしかば、あはれ、いまはのうつゝにも、さまでに兒等のいとときかと、予と弟とを引寄せつゝ、祖母のひたと泣きたまひしを、日を経、月を経、年経れども、なほまのあたり見る如く肝に銘じて覺えたり。

嬉しきかな。花折りくれし秀の心の、母の情に劣らじを。一枝は母に參らせて、兒の幸あるを見せまつらむ。一枝は父に、他は祖母に、残れる花は弟に半ば分ちて與へむと、深水の奥を辭して出で、心せはしく中戸をあけて、戸外に出でむとしたる時、

「清や、母様がね、お前御苦労だが、一寸、八百屋まで。」

用を命ずる聲のする。この後數來給はむに、心やすだてなるこそよけれ。貴少も遠慮したまふまじ、此方にも行儀見せて、送迎はなさじものと、母親のいひたれば、秀も送りては出ざりし。予も其まゝに去らむとせしが、聲のするより思はずも戸に手をかけたる身を捻向け、唯見れば今日も例の如く鬢の後毛數ふるばかり、横顔白くこぼれたり。

風にも堪へじといとほしかりし、前の日のさまには似で、病に勝ちたる姿雄々しく、全幅の風采の優しう見えて凛々しげなる、恐しき敵にであはむ時、其袂にて庇はれなば、救はれ得べし、と頼母しく、うつかりと立ちたるを、ふと見返られて、耳許ぞ熱くなりぬる。

「またね、」

といふ聲聞流して、勢よく戸外に出で、店なる人に黙禮して、通を家路へ五歩ばかり、足ばやに行きかゝる、とむかひより、杖を持ってさぐりながら、歩きつきの、然までは覺束なき状も見えで、彼の富の市來懸りたり。

擦違ふを遣りすごし、立どまりて見送れば、富の市はつか／＼と深水の店に入り行きしが、

「は。」

とばかり茶の山高の帽の縁に手をかけたるのみ、脱ぎて挨拶なさむともせで、其まゝ今予が出来れる、中戸をあけて入り行きぬ。

買物ならば店にてせむ、奥に入りしは知己よ。固より渠は盲人といへども、置く霜に足駄を印して、夜寒の景に叙せらるべき、さる境遇のものにあらず。資産ある家の長子にして、親もなほ世にあるが、十六の時激烈なる、天然痘にかゝりしため、目の盲ひたるものゝよし、予は人傳に聞きて知れり。

よしそれはともかくも、渠は何の要ありて、深水の家に出入るや、店のものに對したる其舉動を見ても知る、懇なるなかにあらではと、こゝろよからず感じてき。

渠には聊かかゝはりなく、何等の恨あるにあらず。先刻に學校にてミリヤアドに戒められて悄れし時、一言いひたる言とて、機が機なり、わが耳の癖みと思へばそれまでなる、其を取りいでゝいふことかは。嘲る如く聞きたりしも、實は慰めく

れむとて、いひかけたらむも知れざるを、何とてさままでに富とみの市いちの御身おんみにこゝろよからざると、もし人ひとの問とはむには、予よは
其答そのこたへに窮きうせしならむ。因果いんぐわは神かみのみ知るものなり。

將棊しょうぎ

がばり、がばり、がばり、がばり、がばり、
白山氷はくなんがばりがばりの、
聲こゑにまじりてなまぬるく、
帽子焼ぼうしやきぢや、
帽子焼ぼうしやきぢや、
お腹なかの

薬の帽子焼ぢや、子供衆買ひな、と呼びかはす、白山氷や、帽子焼や、夜商人の口々に、往きかふ納涼の客を呼ぶ。通りの夜店の賑ひも、十時を過ぐれば人まばらに、其夜は一天揺曇り、まだ一滴も落ちざれど、乾の方なる遠山には、はや一驟雨かゝりけむ、涼風さつとおろし来て、露店のはだか火漸次に消え、四角あたりの眞くらきに、瓦斯燈の火影長くさして、絞りの浴衣一人行き、二人行き、一人行き、一人行き、一人行きつゝ、ひつそとなりぬ。

秀は此時、金と銀と數十個の懐中時計を納めたる、硝子蓋の函の後に出来りて、肩少しく見ゆるまで、函越に顔をさし、椅子にかゝりて店のものと、さきよりもの打語りたる、予を手眞似して招きよせぬ。

「新ちゃん、まかしてあげませう。」

其處に置きたる將棋盤と、秀の顔とを見くらべながら、

「またね。」

「またつて、お厭なの。」

「厭ぢやないけれど　だつて弱いんだもの。僕に勝つてつこはありやしない。降参をしてしまふが可いや。」

「おほゝ、何かいつて在らつしやるのね。昨夜も二度までお負けだつたぢやありませんか。」

「そりや、歩三枚では負けることもなくつてさ。何だつて、ずっと段が違ふんだもの。勝つたつて、負けだつて、張合も

何もありません、ほんのおあひてをして居るんだ。」

「あら、あんな事をいつて、憎らしいよ。まあ、何でもようござんすからさ。よう、新ちゃん。」

と早や駒をぞ整へたる。

店より若い者口を出し、

「大層凝つてますね、お秀さん。はさみ將棋のうちは新ちゃんの方から御催促のやうだつただけが、此頃ぢやあなたの方で、

せつゝいて在らつしやる。大分あ、ぶらがのつて來たと見えますね。」
と打笑ふ。

「あゝ眞個だよ。何故だか、ひどくおもしろいの。」

「まあ、結構でございます。折角御修業なさいまし。はゝゝ、
とて新聞を読むなりけり。」

「さあ、新ちゃん、金ですか、歩ですか。」

「や、いよゝはじめるの。まるであかんぼのあしらひだ。何だか先生になつて教へるやうな氣がするからね、こんなことは眞剣でなけりやおもしろくないものを。」

とこのごろはやなつかしみて、殊更に渠を婦人といふ遠慮も少しく薄らぎたるなり。秀はわざとらしく怨めしげに、

「ようございます。澤山そんなことを、おつしやるが可い。私や意地になつて、何うしてもにがしませんよ。而して、そんなに、強いことをおつしやるなら、斯うしませうね。新ちゃんがお負だつたらば、お手をついて三おじぎをするの。可うござんすか。」

「それだと、勝つたら何うするの。」

「さうするとね、私が天狗様の羽團扇といふ、傳授ごとを教へますよ。」

「天狗の羽團扇ツて？」
「それはね、かうやつて、かういふ工合に、ね、駒をならべるの。而して新ちゃんが、左からでも、右からでも、ちうゝたこかいなど、かう算へてね、御自分の好きな駒を一つ覚えて置くの。さうするとね、私がちやんとあてゝ、此でせうといふのが、不思議に當るんです。」

「そんなことをいつて、あたるか不知、」

「まあ、ちよつと覚えてゝごらん遊ばせ。え、え、可うござんすか。それではと不思議でせう。ですから天狗様の羽團扇ツていふの。」

これ、ね、そら、御覽なさい。

七ツ八ツの幼児を、あやすが如き言の調子に、予もまきこまれて、たわいなく、

「妙だねえ。もう一度やつてごらんなさい。可いかい。よし覺えた。」

「幾度してもをんなじことよ。左の上の方から三ツめ。香車でせう。もう外れつこはございませぬ、ねえ、友さん。」

戸外より見えざるやう、彼の函を小楯に取りて、店とは別に隔りたる、奥の通路になりをれる、疊二疊敷きたる處に、彼の洋燈の光をうけて、照返す一面の大姿見かゝりたるため、あかるければ灯も置かで、秀と二人坐りたるなり。

「ねえ、友さん。」

と秀の呼ぶに、店のものは函の彼方より、

「あい／＼、然やうでござい。」

と大きく答ふ。秀は打笑み、

「これにはね、ちやんとたねがあるんですよ。友さんも知つてるわねえ。」

「え、そりやもうたねのないことは御法度ですから、あるにやありますが、まことに輕少なもので。」

「でも不思議ぢやありませんか。」

「然やう、天下恐らく此位不思議なことはございませぬ。」

「可いよ。まあ新聞を御折角。さ、新ちやん、お負けなさいますと三ツおじぎ。ようござんすか。お勝ちだつたら、をしへてあげます。」

「さきへ、たねをあかしてかゝつたつて可いくらゐなものだ。おや、お世話様、僕の分までおならべだが、兩駒をはずしたゞけか。何、これでかゝらうなんて、氣が強いなあ。」

「いまぢや、もう歩三枚なんてわけに、ゆくものですか。」
と歩をつく。

「来たな。」

「まづこれをね。」

「さあ。」

「かうやつてト新ちゃんですよ。」

二手三手差合ふ折から、店頭に蹙音して、

「今晚は。」

といふ聲の、扶るが如く胸に響き、汗出づるまで身に感ず。富の市ハヤあがり込みて、二つ三つ店のものに、ものいひかはすが聞ゆるなり。

一夜おき、二夜おき、三日とは缺かすことなく、予の此處に来る毎に、此方おくるゝか、渠早きか、前後して、富の市と、秀の前に、かく落合はざること、いまに到るまで一たひもあらざるなく、ために二人してすることの、何時も其に妨げられて、予は遺憾なきことを得ざりしなり。

さらでも不快なる盲人なるをや。予は其聲を聞くと齊しく、むら／＼と癩癩起りて、胸のうづくと思はれき。

「新ちゃん、何をうつかりするの。」

秀のいふに心着きて、あらぬ駒を進むる處へ、富の市は入來りて、かれとわれとの間をへだて、盤の一方に座を取りしが、直ぐに口をさしはさみて、

「何うしました／＼。あゝ、なるほど中飛車で、むかうの手からは桂馬があがつて、ふむ。」
と一々問糺し、おのが記憶に將棋を描きて明かに盤面を知り得るなり。

かくのごときこと例なるに、予はうるさゝにものいはねど、秀は一々深切に、兩方の駒の進退を、落もなくいひ知らしつ。

俄に嬉しげに叫び出せり。

「おゝ、嬉しい。飛車手、王手、ね、ね、新ちゃん。」
とあふるゝ如き笑を含みて手を拍ちぬ。

予は大業に驚きたり。

「え！こりや弱つたな。かうするんぢやなかつたツけ、かうするんぢやなかつたツけ。一寸一手待つて下さい。」
「不可ません。かけつこですもの。三つ御辭儀を遊ばすんだわ。」

「つい傍見をしたんだからさ、」
「そりや新ちゃんが悪いんだもの、待つたなんか卑怯ですよ。」

「困るなあ／＼。お辭儀をさせられちや大變だ。女にお辭儀なんて僕は、
「ですから然ういつたではありませんか。あまりお威張りなすつて憎らしいんだもの。嬉しいねえ、」
「ちよつ口惜い！」

先刻より苦笑したる富の市は、予を卑みたる語氣をもて、

「へゝゝ、飛車で勝負をしまし。何を然う弱るんだ。そして何、歩を一個あひとうては、理屈もなにもありやせん。
其を知らんやうな將棋でもないに。」

「え。」

「君はへつらふね。はゝゝゝ、何時でも然うだ。まるで段の違ふ將棊なくせに、秀さんがつまりさうになると、わざと駒をあけてにがしたり、わかり切つて居るものを、それ今のやうに好んで手落をして弱つて見せたり、はゝゝ、負けておもしろがるのは妙な人だ。年紀もゆかないに。はゝゝ、何でも秀さんの喜ぶのが嬉しいと見えるね。はゝゝ、お殿様のおあひて將棊だ。君は秀様におべつかをして居るのだ、如才のない。」

全身の血は頭にのぼりて、耳ぐわつと鳴るとぞ覺えし。

十分時の後は家に歸りて、あふぎ倒れて、わつと泣きぬ。盲目の言皆中れり。亡き母上よ、許させ給へ。さる兒は産ませたまはしを。